

一生尾が擧がらんぞ、今の話を聞いてみれば、幼ない時分に別れた私の弟か」

「エ、そんなら貴郎が鴻池さんへ貰はれなはつた兄さんですか、ア、面目ない」

「そら何を云ふね、お前の様な弟が有つたら私は世間へ尾が上がるん、二丁目三丁目、今聞いてみると幼ない時に別れた、私の弟やと」

「ほんにそう云ひなはると、兄弟はあらそわれんものや、貴犬おんたに鼻筋が宜う似てます」

「これから俺同様仲宜うして呉れ」

「そんな事を知らんもんだすよつて、えらい失禮をしました」

「弟、此方へ這入り」

「此處は何處だす」

「私が貰はれて來た鴻の池さんぢや」

「這入つても怒られまへんか」

「私に尾いて此方へおいで」

裏の藏の間の日當りの宜い處へ連れて參りました。

「腹はどうや」

「一昨日から何も食べてまへん」

「そんな事をするから病氣が出るね、其處に有る器の中の物を食へ」

「是れが兄さんの食器ですか、塗物で立派なもんだすな、此様な入物で食べたら舌が荒れへんは、私等彼方の芥箱の底を舐めたり、摺鉢の底を舐つたりするので舌が疵だらけや。戴きます」

「せいだい食べて緩り養生せい、お醫者にも見て貰ふて遣るし、病氣の都合で入院もさして遣る、温泉へも入湯に行け」と云ふて居りますと、座敷の方より

「コイ〜〜〜」

「ア、呼んでござる、何ぞ御馳走を貰ふて來て遣るぞ、待つて居い」

牛蒡の様な尾を振つて走つて行きました。暫時すると眼の下一尺も有る鯛を唾へて來た。

「サア、これ食へ」

「これなんだす」

「鯛の濱焼ぢや」

「えらい御馳走だんな、貴犬身をお食り、私は骨を戴きます」

「私は毎日食べてるお前食べ」

又奥から

「コイ〜〜〜」